# 実践1 「命に向き合う時~みんなで出した結論だから~」

概要 子どもたちが魚釣りや魚調べをしながら外来種と出合い、生きている命を絶たなければいけないこともあると知り、疑問や課題を追究していきます。保育者も、子どもと共に「揺らぎ」、共に悩み、子どもの声、言葉を聞き、子どもたちの探究、「もっと知りたい」を深く追求していきます。

ポイント 5歳児の子どもたちが熱中し続け、プロジェクト活動になった「けやきのもり水族館日誌」。その事例の中から子どもたちの熱中する姿や、疑問をもつ様子、そして葛藤を繰り返しながらも、クラス全体で納得できる一つの結論を導き出す過程に「科学する心」の価値をおいた実践です。

## (学)仙台みどり学園 幼保連携型認定こども園やかまし村

5歳児



園の教育目標の一つである「自分自身も地球の中の自然の一つだということを感じられる」を達成するために、様々な自然体験活動を実践。5歳児のプロジェクト活動の最終目標に達成できるよう、実践を積み上げている。

### ① ザリガニを餌にする!? ~外来種って…~ (9月13日~9月18日)

園周辺の水路を辿り、生き物探しをすることが日常となる。ザリガニをたくさん捕まえ、園に持ち帰る子どもたち。そんな時、「昔の子どもは、ザリガニの身を餌にして釣りをしていたんだよ」という話を知る。その話から、これまでは**飼い方ばかり調べていたザリガニについて、もう一度調べてみることになった**。"アメリカザリガニは日本の在来種の小さな魚を食べること""田んぼの稲を切ってしまうこと""外国から来た生き物「外来種」であること"などが分かり「ザリガニは悪いやつだ!」という声も出始めた。「前、逃がしちゃったよね」ということを思い出した様子もあったため、今回捕まえたザリガニをどうするか話し合い

ということを思い出した様子もあったため、今回捕まえたサリガニをどうするか話し合いを行った。子どもたちの"魚を捕まえたい"という思いは強く、「ザリガニを餌にして鯉を釣りたい」「ザリガニは小さくても逃がさない」という結論になり、捕まえたザリガニは "餌にする"ということを前提に水槽で飼うことになった。



保育者の思い: ザリガニをコイの餌にする。このような結論を子どもたちが得たことに少し驚いた。生き物を殺して、他の生き物の餌にする。このようなことを保育の中で行うということに抵抗もあった。しかし、子どもたちが本当にしっかり調べたうえで外来種について理解している様子が伺えた。千葉県環境生活部自然保護課HPでも「学校教育の現場で使用しない」「やむを得ず使用した場合は必ず外来種であることを説明する」「再リリースは絶対避ける」ということが書いてある。このことからも、たくさん捕れるザリガニを今後どうするかは担任としても頭の痛い問題であった。そんな時に子どもたちから「ザリガニを餌にして魚を捕まえる」という選択をしたことは一つの出口が見えた気がした。と同時に「命を粗末にすることになりはしないか」と心配な気持ちも芽生えた。

#### ② 悪い魚…?(9月18日)

毎日魚を取り続ける日が続いたことで、魚が増えたことや"水族館みたい"という声が多くなり、子どもたちから「もっと魚を捕まえて水族館にしたい」「そしたらもっと水槽を暗くしないと」「水族館の名前も決めたい」と子どもたちの中で**水族館をするイメージが広がり盛り上がっていく**。



#### ③ 魚が魚を食べた??(9月30日)

そんな時に、20匹以上いた稚魚が連休明けに5匹ほどになっているというハプニングが起きた。水槽の中にはドジョウ、フナ、モツゴ、稚魚しか入っておらず、なんでいなくなってしまったのか子どもたちは不思議に思うのと同時に「これじゃあ水族館できない」と落ち込む姿も見られた。「魚が魚を食べたんじゃない?」という子どももいて、どの魚が食べたのかを一生懸命探ろうとしていたが、図鑑を見ても肉食の魚は入っておらず、そのことから「小さい魚は水槽を別にしてあげた方がいい」という子どもたちの気づきへとつながっていった。



保育者の思い:図鑑で調べ、魚が魚を食べるという事実について知れば知るほど、「一緒に入れてはいけない魚がいるんだね」ということを考えて水槽を分けたり、お世話する時にも一緒にならないようにしたりする姿が見られた。魚を捕まえ始めたころに比べ明らかに子どもたちみんなの思いが同じ方向を向き、一つのものを作りたいという思いになっていることを感じた。早速、自分たちの水族館の名前を考えることになった。水族館の名前は"けやきのもり水族館"。自分たちの水族館を作るという思いが強くなっていった。

#### ④ 水族館を作るために…うみの杜水族館へ(12月6日)

子どもたちの"水族館を作りたい"という気持ちの高まりを受け、うみの杜水族館(仙台市宮城野区)へ見学に行く。水族館では子どもたちは淡水魚コーナーで立ち止まり「この魚はけやきの魚と同じ顔!」「似てる」と水槽を眺めたり、「ライトが見えないのになぜ水槽が明るいの?!」と疑問が出たりしていた。



松川飼育員

保育者の思い:淡水魚担当の松川さん(以下松川飼育員)にお時間をいただき、子どもたちの質問に直接お答えいただいた。松川飼育員から「背びれを見たり、模様を見たりしながら色々な図鑑で調べているんだよ」など聞いた。水族館に行く前は、ライトのことや水槽の大きさのことについて知りたいという声も多かったが、一番必要なことは"魚を知る"ということであることに気づかされたように思う。実際に水族館に行き、そのことに気づくことができ子どもたちはさらに意欲が湧いたようで、図鑑を見ながら魚についてもっと詳しく調べるようになった。

#### ⑤ もしかして…オオクチバス!?(1月10日~)

魚調べをしている中で、Aさんが「この魚、これに似てると思うんだけど」と図鑑を開き持って来た。"悪い魚"に似ている写真。その魚は"オオクチバス"という魚だった。写真を見て保育者も「本当だ、似てる!」と話をした。その後、口伝いに"オオクチバス"という名前がクラス中に広まり、さらに詳しく調べてみると、オオクチバスがモツゴを食べている写真を見つけた。「こうやって食べちゃうんだ…」との声もあった。



オオクチバスを捕まえて、**さらに詳しくオオクチバスのことを調べていた**ところ、図鑑を見ていたBさんとCさんが「オオクチバスは特定外来生物だ」ということに気がついた。オオクチバスは"飼ってはいけない""逃がしてはいけない""運んではいけない"等の決まりがあることがわかった。Bさんは、けやき組クラスのみんなで情報を共有した。

松川飼育員に相談 保育者もオオクチバスが特定外来生物であることを知っていたが、子どもたちが水族館を作るために捕まえたという思いもあったことから、水族館を開く日まで飼い続けられないものかと葛藤があり、松川飼育員に連絡。松川飼育員からは「この魚は日本の法律では駆除することが決まっている」「魚に罪はない」という話をいただいた。

オオクチバス?







**保育者の思い**:外来種であることは知っていたが飼うことも、移動も厳しく禁じられている「特定外来生物」であることが分かり、飼い続けることは難しいということを子どもたちに話さなければいけないことに悩んだ。悪い魚と言いながらも、水族館での展示を目指したり、餌をやって世話をしたりする姿もあったからだ。また、保育の中で生き物を駆除する(殺す)という行為が果たして子どもたちにどのように受け入れられるのか非常に厳しい選択だなと感じていた。

#### ⑦ 緊急けやき会議 (1月29日)

松川飼育員と電話で話した後、すぐに緊急のけやき会議を開き子どもたちと話し合いを行った。オオクチバスは駆除しなければならないということや松川飼育員からの言葉を伝えると「えぇー…」「なんで?」「殺しちゃうってこと?」「かわいそう」という声があがった。どうして駆除しなければならないかという疑問がたくさんあったため、図鑑に載っていた「ある池ではたくさんいた在来種がオオクチバスを池に放したところ数週間で激減した」という情報を知らせた。すると「他の魚食べられちゃうし、しょうがないよ」「決まってるなら駆除す

**るしかない」という思い**も聞かれ始めた。子どもたちにどうするか問うと「かわい そうだけど駆除するしかない」「悪いことしている水族館はいやだ」というクラスの 思いになった。「駆除したら水族館できない」という声もあったことから、子ども たちと相談し、保育者は駆除したオオクチバスを冷凍保存することを提案し、水族 館に展示することにした。



#### ⑧ けやきのもり水族館オープン(2月21日~3月6日)

2月21日に水族館をオープンした。2週間の間保育室はずっと水族館仕様にし、松川 飼育員をはじめ、他クラスの子どもたちや保護者の方、野村小学校の児童や先生、姉妹園 の子どもたち等、たくさんのお客さんに来ていただいた。子どもたちは"けやきのもり水 族館の飼育員"として今まで調べてきたことを発揮している様子が見られた。



#### 9 日本の魚を守りたい(3月13日)

これまでたくさんの魚を捕まえてきた用水路に、けやきのもり水族館の魚たちを逃がしに行った。「これから旅に出るんだな」「ちょっと悲しい」とこれまで長い時間を共に過ごしてきた魚への思い、寂しさが伝わってきた。在来種の魚たちを用水路に逃がすとみんなが「ばいばーい」と手を振った。「いろいろ教えてくれてありがとう」「捕まえさせてくれてありがとう」「小学生になっても応援しているからね」と魚に声を掛け、見えなくなるまで見守っていた。魚の姿が見えなくなると子どもたちは花を摘み、「オオクチバスも大好きだよ」「ありがとうの花」と言いながら摘んだ花を用水路に散らしていた。部屋に戻り、少なくなった水槽を見て「なんだかわからないけど寂しい」との声もあった。元の場所に戻してあげることが最善だとわかっていながらもこれまで一緒に過ごしてきた魚への気持ちが感じられる一言だったと思う。







魚のこと・用水路 (川)のこと・自然のこと…それぞれたくさんの思いを感じてきた身近な生き物たちとの毎日。魚を通し、分かったことがたくさんあったねと子どもたちと振り返った時、ふと聞こえてきた「オオクチバスありがとう」の言葉。するとみんなが「ありがとう」とお辞儀をし出した。保育者も「本当にありがとうだね」と子どもたちと一緒にお辞儀をし、オオクチバスへの感謝の思いを子どもたちと共有した。水族館で展示していたオオクチバス 2 匹と最後に用水路で捕まえたオオクチバス 2 匹は、卒園の記念に子どもたちが植樹した桜の木の下に埋めることにした。オオクチバスの命が栄養となり、毎年綺麗な桜の花が咲きますようにという願いを込めて…。

#### 命に向き合う時~みんなで出した結論だから~

実践を進める中で保育者が一番悩んだのは言う までもなく「命」の問題であった。松川飼育員の 「駆除しなければいけない」との言葉に「このこと を子どもにどう伝えればいいのか」と受話器を置 いた後、担任は、しばし考え込んでしまった。子 どもたちがどんどん熱中していき、毎日の観察か ら「元気がない」「体が白くなってる」等、魚の変化 にすぐ気づく。これは子どもたちにとって魚が 大切な「モノ」になっているからである。そんな 中での「駆除」はまさに、子どもたちが取り組んで いることとは真逆の行為。ところが、ここでも子 どもたちは保育者を超えた結論を導き出してく れた。なぜオオクチバスが日本の河川、池へと放 流され、特定外来生物になってしまったのか。そ のような経緯を理解し「オオクチバスだけが悪い のではない、運んできた人間も悪いんだ」という 結論。クラス全体で大きな葛藤を乗り越え選択 した身近な生き物との出合い。

このことが子どもたちの中に学びを引き起こし「わかった」という実感をもたらした。これこそが幼児期における「科学する心の芽生え」であると確信するものである。

